

改訂の序

本書の初版であるレジデントノート増刊「同効薬、納得の使い分け」が2019年に発行されてから約6年が経過しました。卒後研修必読の書であるレジデントノートの中でもこの増刊号は特に反響が高く、現在でも多くの読者に読まれています。一方でこの6年の間に新たに使用されるようになった薬剤、ガイドラインの更新などもあり、このたび、改訂が行われることになりました。私は今回の改訂から共同編集者として参画させていただきましたが、自らが研修医のときにお世話になったレジデントノートの構成に携われたことを大変光栄に感じています。

今回の改訂では『“なぜその処方を選ぶのか”について、根拠とともに上級医がもつ現場での思考プロセスを学ぶ』という初版から続く企画の特徴を活かしながら、読者の方に最新の情報を届けたいという信念のもと、内容のアップデートだけでなく、読者の皆様から寄せられた貴重なご意見に基づく項目の追加も行いました。

また、第1章「総論：薬の使い分けの基本事項」を拡充し、2つの項目を追加しました。1章-2ではジェネリック医薬品の役割について医療経済学的視点から解説していました。さらに1章-3では、投薬の目的や求めるアウトカムについての考え方という、すべての投薬に関連する内容を解説いただきました。これらはどの診療科に進むとしてもすべてのレジデントに関連する内容であり、ぜひすべての読者にご一読いただければと思います。

この改訂版が、初版と同様に若手医師の皆様にとって有用なガイドとなり、日々の診療に役立つことを願っています。また、指導医の方々にも若手医師の教育や指導の際にご活用いただければ幸いです。

もちろん、「処方」や「薬の使い分け」といった内容は大変奥深く、一冊の書物のみで完結するものではございません。本書の内容をもとに、レジデント同士でのディスカッション、指導医の先生とのコミュニケーションを通じて、医師としての生涯学習のよいスタートを切っていただきたいと思います。

最後に、羊土社の皆様、共同編集として御指導いただきました片岡先生、各項目の御執筆を賜りましたすべての先生方、素晴らしい薬剤を開発・製造・販売してくださっている製薬会社の皆様、そして何より日々われわれに学びと成長をもたらしてくださっている患者の皆様に感謝申し上げます。

2025年3月

京都大学医学研究科 医学教育・国際化推進センター 講師

生野真嗣

初版の序

「処方する」ことは医師の仕事のなかで重要な一角を占めます。直接的な侵襲を伴う手技とは異なるものの、選択のしかたによっては毒にも薬にもなる「処方」。はじめて使う薬を処方するのが怖い、という気持ちは誰でも感じたことがあるのではないでしょうか。

自分が研修医の頃、上級医の処方をノートに書き写して自分なりの処方ノートをつくっていました。また、自分が処方した薬もどんな患者さんに使った、というコメント付きでメモをとっていました。当時、一般的な教科書はあっても「何を選択したらよいのか」という具体的な処方のしかたまで踏み込んだ本は少なく、苦肉の策として上級医や自分の処方をメモするという愚直な方法をとったのだと思います。無論そのメモを今使うことはありませんが、そのメモを見ると緊張しながら処方をはじめて行った研修医や若手医師だった頃の気持ちを思い出します。同時に、処方は緊張するものであり、漫然と処方することは厳に慎まなければならない、という自身への戒めにもなっています。常に新しい情報をとり入れ、慎重に処方することはわれわれ全員にとって必要なことでしょう。

エビデンスやガイドラインに基づく処方は基本ですが、さらに現場で何を選ぶか、という観点で、現場の経験知は重要です。そこにベテランと若手医師のギャップがあります。なぜ、その処方を選ぶのか、という上級医の思考回路を若手医師が学べば、ベテランと若手医師のギャップは縮まり、若手医師の成長曲線はグッと上向くに違いありません。自分が若手の頃に本書があったらどんなによかっただろう、と思います。

今回の分野および各分野でどの種類の薬剤について解説していただかずか、についてはあくまでも「若手医師が1人で処方するときに参考になる」という視点で選ばせていただきました。また、執筆者は各分野のエキスパートであり、かつ若手の視点に立ってご指導いただける先生にご依頼させていただき、「研修医が知っておくべき基本、および若手医師が1人で処方することを念頭においた処方のしかたを概説ください」とお願いしました。

感染症の総論を執筆いただいた矢野（五味）晴美先生からは各論の執筆者を御推薦いただきましたが、「ベストメンバーの方々からの若手へのプレゼントです」というコメントをいただきました。まさに、本書のエッセンスが端的に示されています。本書は、執筆者の先生の知恵とメッセージに溢れた内容で、若手医師への知の継承でありプレゼントだと思います。はじめての処方は緊張するのですが、1人で処方するときにも、本書を手にとることで指導医の先生が語りかけ、その経験を伝えてくれるような存在になれば、と思っています。また、指導医の立場で本書を手にとられる場合は、若手

にどのように指導するか、という指導の助けにもなる内容にもなっているのではないで
しょうか。加えて、Advanced Lecture のコラムもご執筆いただいた稿もあり、指導医
やベテランの先生にも読みごたえがあり、特に知っておくべき分野について網羅的に
アップデートできる内容になっています。

山のようある薬のなかからどのように選び、どのように使うか。このことは医師と
しての裁量を存分に發揮する場面であり、1つひとつを慎重に、また納得のできる処方
を行うことが医師としての実力を培うための王道なのでしょう。そのための一助になる
パートナーとなるような企画になれば幸いです。

2019年5月

岡山大学大学院 医歯薬総合研究科 地域医療人材育成講座
片岡仁美